

巻頭言 みかんの皮

石垣島に住んでいたころの話である。冬のことで、私の借家の立派な木卓の上にみかんが載っていた。滞在中、和歌山の知合いがみかんを一箱送ってくれたことがあり、塾の生徒たちに配って、「おっ、本場の。」とめずらしがられた。たぶんそのときのみかんであったと思う。みかんを見ながら考えた。こうして放っておいてもみかんはくさらないが、皮をむくとすぐにくさってしまう。とすれば、皮が中身を腐敗から守っているのだ。皮には何か、特別な力があるのだろうか……。この話を仕事場で同僚に話すと彼も感心し、二人で、「みかんの皮はえらい！」と一致した。しばらくしてヤマトから知人がやってきたので、彼にもこのみかんの皮の話をしたのだが、しかし彼は言下に私のこの「説」を否定した。「皮がえらいんじゃない。皮がついている間、みかんは生きている。生きているものはくさらない。」私は感心し、そして少し恥ずかしい気がした。

ある実体が何かの属性を持つとき、実体をいくつかの要素に分解し、どの部分にその属性が宿るかを突き止めようとする。この方法論を還元主義という。一方、全体を要素に分解することなく、部分間の関係を重視し、ひとまとまりのシステムとしてその機能や運動をとらえようとする行き方を全体論的、さらに弁証法的ということもできよう。「機械の中の幽霊」という話がある。初めて機械を見る者は、その中に幽霊が潜んでいて、それが機械を動かしているかのように想像するかもしれない。しかし機械をバラバラにしても、幽霊はいない。幽霊という実体ではなく、部分連合としてのシステムが、機械を動かしているのである。このように、次元の違うものを同一階層にあるかのごとく扱う誤りを、「カテゴリー錯誤」と言うことがある。

私は以前、海岸群集の決定要因についての直観として、半分を無機環境、残り半分を3分して種間関係、回帰定着、その他未知要因を位置づけたところ、ある研究者から、「知の貧困」と、厳しい批判を受けた。みかんの皮の話といい、どうやら私は還元主義的に物事を考える癖があるようなのである。この研究者は、いくつかの要因を仮定して相互の軽重を論ずる還元主義的なやり方に反対し、各要因は、種間関係システムとしての群集のあり方にどう作用するかで評価されねばならないとした。また「弁証法的唯物論」の立場に立つというある生態学者は、還元主義は複雑な全体を部分に分解して相互作用を軽視するため、間接的で予測不能な力の存在によって破綻せざるをえないと主張している。それも一理あるし、また関係を主眼とするほうが複雑である分、'豊かに'（あるいは豊かそうに）見えることも確かである。

しかし、物事には光と陰がある。全体を関係の総体としてとらえると言えれば聞こえは良いが、それで何がわかったのだろうか。そのように主張する人たちの書いたものを見ても、私にはそうかもしれないしそうでないかもしれない、ただのおしゃべりとしか思えない。いや、何がわかったかどころか、要素不可分、種間関係至上主義的群集観にこだわったために、事の本質を見誤る場合もある。寒帯から熱帯に移行するほど存在種数が増えるという、有名な種多様度の緯度勾配の問題において、熱帯では捕食、競争、共生、寄生など種

間関係が複雑で、各種のニッチェが狭いことが多様性の原因であるという「説明」があった。しかしこれは原因と結果を取り違えており、説明になっていない。多くの種がそこに詰め込まれた結果としてニッチェが狭くなっているのかもしれない、そうではないという証明が、まず成されねばならないのである。何もかも種間関係に結びつけて説明しようとする強引さから、こうした循環論に迷い込んだといえなくもない。ベルナールにしろ、パストゥールにしろ、生物学は還元主義によって進歩してきた。今日高校程度の教科書類に示されている化学や生物学の法則や事実のほとんどは、可能な要因を列挙し、それらが相互に独立であるという仮定のもとに一つ一つつぶして行くという、還元主義の方法論に基づいている。

「全体とは不可能である」という言葉がある。人の歴史であれ、生物の群集であれ、複雑な全体像を、衆目の一致するごとく描き出すということはしよせん無理なのであり、そこから何か生まれるとしても、それは思想であって科学ではない。還元主義は、科学が存続する限り捨て去られることはないだろう。「みかんの皮」的カテゴリー錯誤や、過度の単純化に陥ることなく、還元主義をいかに使いこなすかということが、問われている。

< S >